

マイノリティの 子どもたちに勇気をくれる 戦うプリンセス

『ラーヤと龍の王国』

子どもの頃は、ディズニーのプリンセスが苦手でした。自分がレズビアンだという自覚があったわけではないのですが、ドレスを着て、素敵な王子様と舞踏会に行く、という設定にまったく興味が持てず、女の子ならみんな好きなはずと大人たちが人形をくれたりするのも辟易していたからです。

しかし、ディズニー社の中で経営層やクリエイターの多様性推進が進んでいると知って、新作『ラーヤと龍の王国』を観てみると、もう冒頭から引き込まれました。

荒野をダンゴムシのバイクに乗って疾走する、アジア系の、人を信じられなくなった孤独なプリンセス、それが主人公のラーヤでした。父親から教わったのは礼儀作法ではなく、武術。王子様もドレスも歌も出てきません。

戦う相手はもう一人のプリンセスで、アクションがとにかくカッコいい！



村木 真紀さん

認定NPO法人
虹色ダイバーシティ代表

外資系コンサルティング会社などを経て現職。LGBTQ当事者としての実感と、コンサルタントとしての経験を活かし、LGBTQに関する調査研究、社会教育活動を行う。

LGBTの子どもたちは周囲にロールモデルを見出しにくいと言われています。その中で、家族で観るようなメジャーな作品に自分とよく似た姿を見つかることができるのは、とても勇気づけられるはずです。



『ラーヤと龍の王国』

ウォルト・ディズニー・ピクチャーズ
ウォルト・ディズニー・アニメーション・スタジオ / 製作

2021年に公開されたファンタジーアニメ。
かつて龍が守った王国に平和を取り戻そうと、少女・ラーヤが冒険の旅に出る。

排除ではなく包摂を 制度の狭間にある人に 寄り添う

『セーフティネット
コミュニティソーシャルワーカーの現場』

豊中市社会福祉協議会の勝部麗子さんは、コミュニティソーシャルワーカーとして、孤独死、ごみ屋敷、ひきこもり、生活困窮、女性や子どもの貧困、ホームレス、若年性認知症など、地域の生活の中にある課題に取り組んでおられます。

課題を抱えている当事者の多くは、経済的な貧困とともに、人間関係の貧困、つまり、孤立し、誰にも相談できない状態に置かれていて、そのために心を閉ざしてしまっていることも多いそうです。

また彼らが抱える課題に寄り添う制度がないために、役所の担当部署に相談しても解決につながらないことも多いのだと。

勝部さんは、そうした当事者の課題に向かい合い、新たな解決の仕組みを地域に生み出しています。地域にいる“困った人”は、“困った問題を抱えている人”“困った人に文句を言う人”は、“関心を持っている人”そう捉えることで、排除ではなく包摂のための道筋を探っていられるそうです。



山納 洋さん

大阪ガス株式会社
ネットワークカンパニー
都市魅力研究室長
common cafeプロデューサー

大阪ガスで、都市開発や地域活性化に携わりながら、中崎町の日替わり店主カフェ「common cafe」や、芦屋ロックガーデンのシェアカフェ「六甲山カフェ」などをプロデュースしている。

同協議会が発行するマンガ『セーフティネット』は、勝部さんたちの取り組みをとっても分かりやすく紹介しています。



『セーフティネット コミュニティソーシャルワーカーの現場』 1~5巻

ボリン・くろねこ・すみっこ / マンガ
豊中市社会福祉協議会 / 原作・文
プリコラージュ / 刊

地域福祉に奔走するコミュニティソーシャルワーカーの支援の展開について、マンガと文章で紹介。書籍の収益は全額ひきこもりの若者の支援に活用されている。